

---

# 放課後30分。

五堂じゅん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

放課後30分。

### 【Nコード】

N0941N

### 【作者名】

五堂じゅん

### 【あらすじ】

誰かを愛することは、私にとって勉強なんかよりも大切で、今しかできないこと。

「先生、私と結婚しようよ。いますぐここで、キスしてよ。」  
義父からの性的虐待を受け、心に深い傷を負った彼女の精一杯の愛情を先生に注ぐ。

放課後30分の2人きりの時間、彼女にとっての幸せな時間。

五堂じゅんの初連載開始です！

## 1、先生と私。

「先生は、子供が産まれた時のこと、覚えてる？」

高校3年の春、私は先生は訊いた。

私の担任の川上先生は23歳独身。バツイチ。

19歳で結婚、21歳で離婚。

子供がいたそうだが、離婚以来会っていないという。

細身で長身の先生の担当は数学。白衣の似合いそうな先生だ。

「いや、覚えてないな」

先生はいつも言う。

「出産にも立ち会えなかった。俺、授業してたしさ。

実を言うと、子供とあんまり会えなかったし。あの子も、俺のことなんて覚えて

ないと思うよ」

ふーん、と私は先生を見た。

「なんだよ」

先生は少し不機嫌そうに眉を寄せた。

「先生も、やることやってたんだね」

「うるさい。もう5時だぞ、早く帰れ」

先生はまだ明るい空を見た。

ずいぶん陽が長くなってきた。

立ってるだけでも汗ばんでくるのが分かる。

「まだ、5時じゃん。私帰りたくないなあ…」

私は憂鬱になった。

「どうした？何かあった？」

先生の少し甘い声がセクシーだ。

「大丈夫」

私は座っていた机から飛び降りて軽い鞆を持った。

「30分も引き止めちゃったね。先生、お疲れ様。ばいばい」

「おう。また明日」

笑顔で手を振っている先生に私も手を振り返す。

明日もまた、30分。

先生と話す時間は、私にとっての救いの時間。

私は小さくため息をついて帰路についた。

私は相沢夏希。

高校生活も残すところ9ヶ月。

私は、この9ヶ月を、誰かを愛せる時間になりたいと思っていた。

## 2、兄と私

人はどうして、同じじゃないのだろう。

それはきつと、育ってきた環境がそうさせるのではないか。  
同じだったらどんなにいい事か。

同じ意見、食い違いのない話。喧嘩などありえない世界。

「夏希」

「なに」

私は振り返る。

そこには5歳離れた兄、悠太が立っていた。

「今日、お父さん帰ってくるってさ」

「・・・そう」

返事が少し遅れた。

そうか、あの父が帰ってくるのか。

いつもは帰らない。

きつと2号や3号の家にいるに違いない。

そう、あの男は愛人を囲っているのだ。

「怖い？」

兄に聞かれて、首を振る。

「うつん。もう慣れた。昔に比べたら、・・・今はマシな方よ」  
言いながら涙目になる。

「ごめんね、夏希。俺、なんもできなくて」

「いいの・・・しょうがないよ。お兄ちゃんは悪くない」

すると兄は私の座っている横に腰掛けた。

しばらくためらった後、遠慮がちに兄の大きな手が私の髪の毛をかき混ぜた。

「・・・もっつ」

私が苦笑すると兄も同じように笑い「ごめんな」と言って、リビングを出た。

きっと、同じ人ばかりなら、人の優しさなんて感じられない。  
みんな違うから、温かいんだ。

### 3、義父と私。

あれは中学2年の秋。

「いやっ！ねえ、やめてったら！」

はだけたシャツの上から綺麗な手が胸をいやらしく動く。  
おじさんの息づかいが荒くなるのが分かる。

「おじ、さ…ん！いい…っ！いい加減に、して…っ」

堪えきれず喘いでしまった私におじさんは口角を上げた。

「夏希ちゃんは敦子に似ていやらしい身体してるね。

中学生のクセして、胸でかすぎ。

クラスの男子も絶対お前の胸、揉みたいって思ってるよ。

毎日お前のアンアン喘ぐ姿想像してんだろうな」

必死で声を抑えてひたすら事が終わるのを待つ。

敦子 お母さんの再婚相手は私と干支一回り違う、お母さんより

7歳年下の男。

お父さんとお母さんは私が小学3年の時に離婚した。

私はお父さんが大好きだった。

悪いのは浮気したお母さんなのに、両親は離婚して、私達兄弟は不幸な事にお母さんに連れて行かれた。

お母さんの男遊びは離婚をしても変わりはなかった。

今でもよく家に愛人を連れてくる。

それを再婚相手のおじさんが何も言わないのは、彼も同じ事をして  
いるから。

要するに、似たもの同士なのだった。

おじさんは有名化粧品メーカーの跡取りで、だからたくさんのお家を持っている。

そこに、お手伝いさんとして愛人を住まわせていた。

私からしたらお金と欲にまみれた汚らしい男に他ならなかった。

「お父さん」は今でもお父さんだけだし、外に女を囲んでる男なんて死んでも「お父さん」とは呼びたくなかった。

お母さんが家を空けているときにおじさんが帰ってくると、中学生の私を相手に性欲を解消しようとした。

私が「お父さん」と呼ばないのも原因だとは思っ、けど、あんな男をお父さんと認める訳がなかった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0941n/>

---

放課後30分。

2010年10月10日21時15分発行